

## 26日 水曜

### 列王Ⅱ

4:8 ある日、エリシャがシュネムを通りかかると、そこに一人の裕福な女がいて、彼を食事に引き止めた。それ以来、エリシャはそこを通りかかるたびに、そこに寄って食事をするようになった。

4:9 女は夫に言った。「いつも私たちのところに立ち寄って行かれるあの方は、きっと神の聖なる方に違いありません。

4:10 ですから、屋上に壁のある小さな部屋を作り、あの方のために寝台と机と椅子と燭台を置きましょう。あの方が私たちのところに来られるたびに、そこを使っただけですから。」

4:11 ある日、エリシャはそこに来て、その屋上の部屋に入って横になった。

4:12 彼は若者ゲハジに言った。「このシュネムの女を呼びなさい。」ゲハジが呼ぶと、彼女はゲハジの前に立った。

4:13 エリシャはゲハジに言った。「彼女にこう伝えなさい。『本当に、あなたはこのように、私たちのことで一生懸命骨折ってくれたが、あなたのために何をしたらよいか。王か軍の長に、何か話してほしいことでもあるか』と。」彼女はそれにこう答えた。「私は私の民の間で、幸せに暮らしております。」

4:14 エリシャが「では、彼女のために何をしたらよいだらうか」と言うと、ゲハジは言った。「彼女には子がなく、それに、彼女の夫も年をとっています。」

4:15 エリシャが、「彼女を呼んで来なさい」と言ったので、ゲハジが彼女を呼ぶと、彼女は入り口のところに立った。

4:16 エリシャは言った。「来年の今ごろ、あ



なたは男の子を抱くようになる。」すると彼女は言った。「いいえ、ご主人様。神の人よ、このはしために偽りを言わないでください。」

4:17 しかし、この女は身ごもり、エリシャが彼女に告げたとおり、翌年のちょうどそのころに男の子を産んだ。

不従順の王たちのもとで神のことばを取り次いだ預言者が「神の人」であったことを証しています。また民の中には預言者を尊んで主に従う者もいたことがわかります。

この「裕福な女」は霊的に目が開けた人で、エリシャが「神の聖なる人」であることを感じ、神のためにその人に協力したのです。主のためには直接の働き人も必要ですが、働き人を支える人も必要で、その優劣はありません。主に与えられているものは預かりものですから、それを用いて主のお役に立ちましょう。

エリシャは女の協力を当たり前とは思わないで、主の恵が表れることを求めました。彼が自分の目的だけの実現を目指したのではなく、主のみこころの全体を願ったことがわかります。主のために互いに協力するなら、その恵は全体に及ぶのです。

この女は子がなかったのですが、それでも「しあわせに暮らしております。」と満足していました。主に与えられた人生や生活、状況を信仰ゆえに肯定的に捉えていたことがわかります。そして主のために生きるとき、主はさらなる恵、考えてもいなかった恵みをくださるのです。

私たちは自分がその点でどうであるかを吟味して、主の恵の人生に歩んでいきたものです。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

